



269号
2021/12

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



鹿港天后宮前にて：台湾の西海岸中央にある港町「鹿港(ルーガン)」。古くから良港として栄えた。海の神「馬祖」に安全を願う「天后宮」には、参詣者が絶えない。(台湾彰化県鹿港鎮 2018年10月 撮影 佐々木健之)

‘わんりい’ 2021年12月号の目次は20ページにあります

この言葉、日本語では「老いてますます盛ん」と言い慣わしていますね。

・>・>・>・>・>・

後漢の時代、馬援ばえんと言う将軍がおりました。ある時、将軍は一人の囚人を都に送り届ける任に就いておりました。都までの道中、囚人の話を聞き、世の中が乱れていて、彼は都に着けばきちんとした吟味もなく死刑になるようなので気の毒に思い、逃がしてやりました。これ以後、役人を辞めて北の方へ行って、生活のために牧畜を始めました。

馬援は若いころから、牧畜の仕事がしたかったので、土地を開墾し畑を作り、馬や牛を飼って、豊かになりました。彼は善良な人間で、自分が作り上げた財産を、親せきや友人に全部分け与えてしまいま

した。そんな馬援に、ある人が尋ねました：「あなたは自分が苦勞して築いた財産を、なぜ他の人たちに分け与えてしまうのですか？」馬援は答えました：「自分の財産をただ守るのは守銭奴で、面白くありませんよ。男と生まれたからには、生きるために日々努力を重ね、年老いてもますます元気に、若者と同じように過ごしたいと思っていますから、財産なんていりません」

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：年をとっても意気は盛んで、心身共に若い者には負けないことをいう。老人も若い時の気持ちを保って努力すれば、どんなことでも成し遂げられることを指す。

使い方：叔父は今年 60 歳を過ぎたが、未だに若者のようにグラウンドを走り回っている、本当に老いてますます盛んだ。

この言葉は、「後漢書」で馬援将軍を語る時に使われています。馬援は、先祖代々漢王朝に仕える名家の出でしたが、曾祖父の時代に不祥事があって、前漢が滅ぶまで、役職には付けない処分を受けていました。王莽おうもうが前漢を滅ぼし、新と言う王朝を建てたことで、役人になりましたが、乱れた世の中で、上記お話のように囚人を逃がしてやる

ことがあって、役人を辞めました。新が 15 年でほろんだ後、暫くして、劉秀（光武帝）が即位して後漢が成立しました。

新が滅んで後漢が建国されるまで、各地で領地の争奪戦が起りましたが、劉秀のもとへ使者として出かけた馬援は、劉秀の人柄にほれ込み、以後、光武帝（劉秀）の配下で後漢の安定と発展のために尽力しました。皇帝の傍で進

言をすることもありましたが、主として軍を率いて内乱を平定したり、現在のベトナム国境まで出かけて、地方の反乱を制圧したりしました。

60 歳を過ぎても南方（現在の湖北省あたり）への討伐に志願し、「もう年だから」と思い留ませようとする光武帝の前で馬上姿を披露してアピール、光武帝に「鬢鑠かくしやくなるかな、この翁」と言わせたそうです。元気な老人を形容するのに、「鬢鑠」という言葉を使うのは、この故事によります。

馬援の娘は第二代明帝に嫁ぎ馬皇后となりました。後漢の当初 3 代は比較的安定した時代だったと言われています。その理由は、光武帝の陰皇后、明帝の馬皇后が賢い女性で、一族の政治介入（外戚政治）を阻止したからと言われています。馬皇后の賢さは、父である馬援の生き方、考え方に影響されたのではないかと考えます。



挿絵：満柏画伯

崔顥の『長干行』

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

崔顥(704?~754)は七言律詩の名作『黄鶴楼』によってその名を後世に残した詩人です。この作品は前にも取り上げましたのでご記憶の方も多いかと思いますが、とても重厚で個性的な作品でした。しかしこの詩人の足跡については不明な点が多く、やや謎めいています。

『旧唐書』文苑伝によると、若くして進士に及第し、才能に恵まれながら素行が修まらず、酒と博奕に明け暮れ、その上美人好みで、4人も妻を取り換えた、とあります。また元代の文人辛文房の『唐才子伝』には、若い頃は「浮艶」「軽薄」な詩ばかり作っていたが、晩年には詩風が一変し、気骨のある詩を作るようになった、とあります。

『全唐詩』には42首の詩が採録されていますが、その中に『長干行』と題するものが四首あり、『唐詩選』にはそのうち一首が載っています。また『唐詩三百首』にはそれを含めてもう一首、計二首が載っています。今回取り上げるのは『唐詩三百首』所録の二首です。先ずはその第一首から。

[原詩] cháng gān xíng 長干行 qí yī 其一

jūn jiā hé chù zhù
君家何處住

qiè zhù zài héng táng
妾住在橫塘

tíng zhōu zàn jiè wèn
停舟暫借問

huò kǒng shì tóng xiāng
或恐是同鄉

- *長干行=樂府題(古代民謡)の曲名。「行」とは歌のこと。(長干曲)ともいう。長干は地名。金陵(今の南京)の長江沿岸にある港町。
- *妾=わたし。女性の第一人称卑称。
- *横塘=長干城内の地名。
- *暫=暫く。ちよいと。
- *借問=訊ねる。
- *或恐=ひょっとしたら~かも知れない。

[和訳]

あん 兄うちのお家はどこかいな

わて 妾の住まいは横塘や

とど 舟を停めて問い申す

あん 兄くにのお郷も同じかや

続いて同第二首。

[原詩] qí èr 其二

jiā lín jiǔ jiāng shuǐ
家臨九江水

lái qù jiǔ jiāng cè
來去九江側

tóng shì cháng gān rén
同是長干人

shēng xiǎo bù xiāng shí
生小不相識

- *九江=今の江西省九江市。南京より数百キロ上流にある長江の港湾都市。一説には南京を中心とした長江下流域一帯を指すという。
- *來去=行き來する。
- *生小=幼少期から。
- *不相識=顔見知りでない。

[和訳]

わし 儂はこれまで九江の

水に漂う浮草暮らし

ちやうかん 長干生まれの同郷なれど

お前と遇うのは初めてや

もともと〈長干行〉は若い男女の恋心を詠う民謡でした。中には男女の掛け合いをもとにした相聞歌もあったようです。女が先に詠い男がそれに答え、意気投合すればその場で結ばれる。長江流域の農漁村社会には古代日本の歌垣の源流ともいえる風習が古くからあったと言われます。崔顥の作品はそれを五言絶句風にアレンジし、パロディー化したものと思われま

賈島の「尋隠者不遇」

報告：寺西俊英

今回は、賈島の「尋隠者不遇」（隠者を尋ねて遇わず）について解説して頂きました。

賈島（779～843年）と言えば、皆さんは「推敲」の故事を思い浮かべられると思います。『題李凝幽居』（李凝の幽居に題す）という詩の中に出てくる〈僧敲月下門〉の〈敲〉の字についての問答に由来する話ですが、このことは後述するとしてまず賈島の紹介から始めましょう。

賈島は中唐の詩人で范陽（河北省・涿州市）の人です。涿州市は、三国志演義の中で劉備・関羽・張飛が兄弟の義を結んだ桃園の誓いで有名なところですが、彼は毎年のように科挙を受験しましたが、その都度落第し、ついに出家して無本と号しました。後に唐宋八大家の一人である韓愈（768～824年）に認められて還俗し、その後進士に挙げられましたが、役人になっても地方巡りばかりで、官途に恵まれないうまま亡くなりました。

彼の詩については、荒涼とした詩句が特徴で、一字一句に苦吟を重ねるといった作風で、それだけに表現が陰しく伸びやかさに欠けていると評されています。『題李凝幽居』の詩は、正に苦吟を重ねた詩かもしれません。また前述の韓愈の弟子に、生涯親交のあった孟郊（751～814年）という詩人がいますが、二人とも韓愈に師事して一派を形成しました。孟郊の詩は、難解な語句を多用し、沈鬱な雰囲気を持っていたようです。宋代になって蘇東坡は、この二人の詩人のことを《郊寒島瘦》と評し、これが一つの成語になりました。つまり同時代を生きた孟郊の詩は寒々としており、賈島の詩は瘦せこけていると言うのです。賈島の詩は『唐詩選』には、二首しか採用されておらず（その内の一首は、他人の作とも言われている）何が瘦せこけているのかさっぱり分かりませんか？ 孟郊とは親友であったからか、韓愈は彼の詩を、〈漢魏の詩の風韻を持つ〉と高く評価しています。なお賈

島は五言律詩に長じ、ネットには晩唐から五代にかけて多くの詩人が彼の詩を学んだということが書かれており、二人とも並みの詩人ではなさそうです。

それでは「尋隠者不遇」を見てみましょう。この詩は、松の木の下で童子に「先生（師）はご在宅ですか？」と尋ねると、「今先生は薬草を採りに行きました」「山中のどこかにいるでしょうが、雲が深いのでどこにいるかわかりません」と言う。見た通り問答形式の、とても分かり易い五言絶句ですが、隠者の住む世界を端的に表した詩でもあるようです。まずその作品と読みを記しますと――

xún yīn zhě bù yù
尋 隠 者 不 遇

sōng xià wèn tóng zǐ
松 下 問 童 子

yán shī cǎi yào qù
言 師 采 药 去

zhī zài cǐ shān zhōng
只 在 此 山 中

yún shēn bù zhī chù
云 深 不 知 处

しょうかどうじ
松下童子に問う

言う、師は薬を採りに去る

ただ此の山中に在り

雲深くして処を知らずと

隠者は、身の回りの世話をさせるため少年をそばに置くのが通例と言われます。隠者は山中の薬草を採って里に出て病人を救ったり、または売ったりして生業をたてるようです。冒頭の「松」の字について植田先生は、「隠者が風格のある人物であることを連想させますね」とお話になりました。松と言う樹木は、隠逸の世界の象徴とも言える雰囲気醸し出すのでしょうか。さらに先生は「この詩は日本人にはあまり馴染みがないかもしれま

せんが、中国人は皆よく知っていますよ」とも。この詩からは、前述の〈賈島の詩は瘦せている〉という蘇東坡の評価は当たらない気がします、皆さんは如何でしょうか？

さて、冒頭に述べた「推敲」の故事に移ります。実はこの詩は、2年半前の『わりりい』243号(2019年5月)に、微に入り細を穿つ花岡さんの名解説が掲載されていますので詳しくはそちらを読み返していただくとして、それ以降に入会された方もいらっしゃいますので簡潔にこの詩を改めて紹介させていただきます。その前に皆さんご承知の「推敲」が生まれた状況を簡記しますと、〈賈島は、自分が書きあげた詩の中の「僧は推す月下の門」の一句を「僧は敲く月下の門」にすべきか迷っていた。ロバに乗って考えに耽っていると、京兆の尹(長官)であった韓愈の行列にぶつかってしまった。賈島はすぐ捕らえられ韓愈のもとに連れていかれた。そこで彼は正直に事の次第をつぶさに申し立てた。それを聞いた韓愈は非礼を怒るところか賈島に「それは〈敲く〉のほうが良い」と教えてやった)ということです。月下に音を響かせる風情があつて〈敲く〉のほうがいい、ということでしょうか。漢字一字のために我を忘れて苦吟する賈島の姿に心打たれた韓愈は、さっそく彼を弟子にしたということです。まかり間違えば打ち首になっていたかもしれませんが、運の良い男ですね。しかも韓愈の弟子になれたわけですから……。その詩を次に記します。原詩と日本語訳を分かりやすいように並べておきます。

tí lǐ níng yōu jū
題 李 凝 幽 居
 jiǎ dǎo
賈 島

xián jū shǎo lín bìng
閑 居 少 邻 并
 cǎo jìng rù huāng yuán
草 径 入 荒 园
 niǎo sù chí biān shù
鸟 宿 池 边 树
 sēng qiāo yuè xià mén
僧 敲 月 下 门

guò qiáo fēn yě sè
过 桥 分 野 色
 yí shí dòng yún gēn
移 石 动 云 根
 zàn qù hái lái cǐ
暂 去 还 来 此
 yōu qī bù fù yán
幽 期 不 负 言

李凝の幽居に題す

隣近所に家一軒もない静たたずかな佇まい
 草くさ茫々の小道が荒れた庭へとつづいている
 鳥ちへんは池辺の樹に眠り
 僧(私?)は月下の門たたを敲く
 橋を過ぎるともう辺りの趣おもむきが違っている
 じつと雲を見ているとその根元になっている
 石が動いているみたいだ
 ここはひとまず立ち去ってまた来ることにしよう
 と、心秘かに誓いながら私は帰途に就いた

この詩で分かりにくいのが、「移石动云根」のところでしょうか？ 243号によりますと、この「雲根」は、古代中国では岩山から雲が生まれているという観念があつたそうです。中国は岩山が沢山ありますが、その景色を見ているとまるで山から雲が湧き上がっているように見える、その雲を見ていると根元になっている石が動いているみたいだ、ということかもしれませんね！ と植田先生のお話が掲載されています。また「幽期」とは、秘かな約束のことだそうです。

賈島は、赤貧の生活を送っていたようで、亡くなった時は韓愈の行列にぶつかった時に乗っていたロバだけだった、ということです。

なお、この話は宋代の文人計有功の『唐詩記事』をもとに、後に尾ひれをつけて伝えられたもので、史実かどうかははっきりしません。ちなみに『新唐書』にも似た話が載っていますが、こちらには韓愈の名はありません。

今回は、中国文学史上最高の女流詩人として名高い「李清照」である。「中国の歴史を彩る美人百花」に彼女を登場させてはみたものの、実は色々な資料を見ても彼女が美人と書いてあるものは見当たらない。李清照については、わんりい 231 号 (2018 年 3 月号) で〈李清照の詞・如夢令を味わう〉として花岡風子さんの名解説が掲載されている。この中に李清照の概要が書かれている。それやこれやで美人百花の一人として取り上げるのを躊躇したが、薛涛・魚玄機と来て彼女を取り上げないのは失礼かと思ったことと、以前済南市に旅行した時、李清照記念堂の入口にスクッと立っていた彼女の真っ白な像が印象的で私の頭の中に彼女は美人だ！と刷り込まれてしまったことが今回登場させた理由かもしれない。極力花岡さんの書かれた内容と重複しないように書き進めていきたい。



李清照 趙国経、王美芳絵(華絵画網より)

私は、大連に赴任中、2008 年の北京オリンピックが終わって一か月経った 9 月に友人と済南と曲阜に旅行した。済南市はさほど知られていない街かもしれないが山東省の省都である。人口は 883 万人 (2019 年調べ) である。済南市については以前旅行記の中で書いたことがあるが、この街は水 (泉) の都である。済南市の別名が「泉城」と呼ばれていることから分かる。済南 72 泉と言われる泉が市内のあちこちに湧き出ている。天下第一泉と名誉な名前を付けてもらった「趵突泉 (とっこつせん)」が有名であるが、「漱玉泉」や「白石泉」・「珍珠泉」も素晴らしい。この「漱玉泉」に隣接して李清照記念堂があり、そこで白像と対面したのである。

さて、彼女の一生を辿ってみたい。彼女は、1084 年

に済南市で文人の家に生まれた。没年は諸説ある (1153 年説や 1156 年説など) が 1153 年としても、当時としては比較的長命と言えよう。李清照記念堂で「李清照詞集」を購入したが、この本の前文によると父親は李格非と言い、1076 年に進士に及第している北宋の文学者である。そして蘇軾 (1037 年～1101 年) の門下を「蘇門」と言うそうであるが、その中での高弟を「后四学士」と言い、その一人と書いてある。話

が少し横道にそれるが、金沢の兼六園の名前の由来は、この李格非の書いた「洛陽名園記」の中から引用されているという。李清照は父の血を引いていたのであろう。

彼女が生まれた 1084 年と言えば北宋 (960 年～1126 年) 年間で、首都は河南省の汴京 (今の開封市) である。長じて 18 歳の時、太学 (当時の最高学府) の学生であった 3 歳年上の趙明誠と結婚した。二人とも本を愛し、骨董類を好んだという。お互いに信頼し合い愛

し合っていたが、彼女にも過酷な運命が待ち構えていた。42 歳の時である。母の葬儀のため夫婦揃って帰郷の途中、歴史に名を残す靖康の変 (1126 年) に遭遇したのだ。北方の金 (女真族) が攻め込んできたのである。そのため宋は華北地方を失った。このため 1126 年以前を北宋といい、以後を都を南方の臨安 (今の浙江省・杭州市) に移したため南宋 (1127 年～1279 年) と呼ぶ。金の攻撃により、夫の任地に置かれた命の次に大切にしていた蔵書はことごとく焼失するという悲運に見舞われた。清照の蔵書も金の兵火と略奪によりすべてを失った。更には 3 年後最愛の夫を病で失ったのである。夫の趙明誠は、金石学の大家になっており、「金石録」と言う金石学の書物を編纂中

であったが未完成となった。金石学とは、金属や石に刻まれた文字である金石文を研究する学問である。清照はずっと夫の仕事を手伝っていたが、靖康の変から南に逃れ落ち着いた後全30巻の書籍を完成させ夫の菩提を弔うことができた。

その後彼女は再婚したが、相手の張汝舟とは性格が合わなかったのか何かと暴力をふるわれ、我慢しきれなくなった彼女は約100日で離婚することになる。第二の人生は、安穩に過ごせると思っていた彼女の思いは完全に裏切られてしまった。その当時の心境を詠ったのが〈声声慢〉と言う私の好きな次の詞である。題名である声声慢は、宋词における〈詞牌〉と呼ばれるものである。詞には、決められた形式の楽曲名が付いておりその楽曲名を詞牌と呼ぶ。少しややこしいが、詞の作者は自分の選んだ詞牌に合わせて作詞して行くため題名である詞牌と詞の内容とは関係がない。なおこの詞を楽しんで頂くため日本語訳を付けた。川合康三氏の「新篇・中国名詩選（下）」から引用させて頂いた。

声声慢

寻寻觅觅，冷冷清清，凄凄惨惨戚戚。
(尋ね尋ね、求め求め、冷え冷え、さえさえ、
凄凄惨惨戚戚と胸が痛み)

乍暖还寒时候，最难将息。
(忽ち暖かくまた寒い今この時、とりわけ体を
劳り難く)

三杯两盏淡酒，怎敌他，晚来风急。
(三杯小ぶりの盃の薄酒で、どうして夕暮れの
吹きつる風に敵うことができよう)

雁过也，正伤心，却是旧时相识。
(雁は飛んで行き、心は正に傷つく。かつて知
りたる仲なれば)

满地黄花堆积。憔悴损，如今有谁堪摘？
(地に満つ黄花はうず高く萎れ傷む。今となっ
ては誰が摘むにたえよう)

守着窗儿，独自怎生得黑？

(窓に身を寄せ、ひとりどうして日が暮れてい
くことに耐えられよう)

梧桐更兼细雨，到黄昏，点点滴滴。
(あおぎり、更に細雨が黄昏に到る。ぱらぱら
ぽつぽつ)

这次第，怎一个愁字了得。
(この有様は、どうしてひとつ「愁い」の字を
もって尽くせよう)

この詞は上記の通りであるが、まず冒頭の「寻寻～冷冷～戚戚」の部分は、繰り返し切々と悲しみが表現されており、リズムもよく悲惨な雰囲気を見事に表しているため、特に高く評価されている。また最後の「这次第，怎一个愁字了得」も有名で、とても印象深い句である。「了得」を辞書で引くと、「とんでもない。なんてことだ。」と言う意味と出ている。彼女の代表作は声声慢の他、前出の231号の「如梦令」もその一つである。また「点絳唇」も、以前漢詩の会で植田先生から「この詞は、李清照の真骨頂を示した詞」と教えていただいた。さらには項羽の運命を詠った五言絶句「夏日絶句」も素晴らしい。

李清照はこれまで述べてきたように42歳までは幸せな日々を送ってきたが、後半生は残酷なほどの人生を送った。前半生の詞と後半生の詞では、全く趣を異にする。離婚後は放浪のような生活を送ったようである。そして最後は身寄りもなく生活も苦しい中、江南の地で寂しくこの世を去って行った。これだけの人物を救う人はなぜいなかったのか、気の毒でならない。

最後に、日本における漢文学の女性翻訳家として著名な花崎采琰(1903年～2001年)の李清照評を紹介して本稿を終わりたい。

(李清照は、宋代が生んだ女詞人の至宝である。彼女の才能は、全く男女の別を思わせない完璧なものであって、南宋十傑に数えられる大家である。男では李後主(李煜=五代十国時代の南唐の国主であり、後主と呼ばれていた。「詞」の大成者として知られる。)、女では李清照と対照されている。李白を加えて詞家の「三李」と認められている。)

中共創立 100 周年と河南省

文 = 村上直樹

中国共産党は今年 2021 年に創立 100 周年を迎えた。100 年前の 1921 年 7 月に上海で第 1 回の党大会が開かれたが、実は、正確な開催日については諸説あるらしい。現在、建党記念日となっている 7 月 1 日という日付は、党の創立記念日を決める必要が出てきた 1938 年に、記憶がはっきりしないため、とりあえず、月初めの 1 日を記念日とした、と第 1 回大会の参加者でもある毛沢東が述べている（石川禎浩著『中国共産党、その百年』筑摩書房、2021 年、46 頁。なお、同書の著者は 7 月 23 日開幕説をとっている）。

この 1 年、さまざまな記念行事・企画が実施されているが、その中の 1 つに「建党百年紅色旅遊百条精品線路」（結党百年革命の足跡を辿る旅・100 の精選コース）の選定がある。これは、中国共産党の指導のもと各民族・人民が中国革命、建設、改革の歴史過程で達成した重大成果の跡を辿ろうという旅行コースの選定である。文化・旅遊部、中央宣伝部、中央党史・文献研究院、国家發展改革委員会が共同で主催し、5 月 14 日には選定結果が中央政府の公式ホームページで公表された。

公表されたリストを見ると、全 100 コースが「一、重温紅色歴史、伝承奮闘精神」（革命の歴史を振り返り、奮闘精神を伝承する）、「二、走近大国重器、感受中国力量」（大国の重責に近づき、中国の力量を感受する）、「三、体験脱貧成就、助力鄉村振興」（脱貧の成果を体験し、農村振興を助ける）の 3 部分からなり、それぞれ、52 コース、20 コース、28 コースが選定されている。

出発点を基準に省レベル別の選定数をみると、すべての省で 2 コースから 5 コースが選定されている（コースによっては、複数の省に跨っている）。5 コースが選ばれているのは、遼寧、安徽、四川の 3 省、4 コース選定は北京、黒竜江など 7 省、3 コース選定が最も多く 15 省を数える。一方、天津、吉林、上海、雲南、西藏、寧夏の 6 省は 2 コースのみに止まっている（表参照）。

第 1 番目のコースは北京の天安門広場からスタートしている。そこに付けられたキャッチフレーズは「偉大征程・歴史見証」である。コース全体は天安門

建党百年紅色旅遊百条精品線路・省別コース数

（出発点ベース）

省名	コース数	省名	コース数	省名	コース数
北京	4	安徽	5	四川	5
天津	2	福建	3	貴州	3
河北	3	江西	4	雲南	2
山西	3	山東	3	西藏	2
内モンゴ	3	河南	4	陝西	3
遼寧	5	湖北	4	甘肅	3
吉林	2	湖南	4	青海	3
黒竜江	4	广东	3	寧夏	2
上海	2	广西	3	新疆	3
江苏	4	海南	3		
浙江	3	重慶	3		

広場—人民英雄記念碑—毛沢東記念堂—人民大会堂—中国国家博物館—新文化運動記念館—李大釗故居—中国人民革命軍事博物館—中国人民抗日戦争記念館—宛平城—盧溝橋—長辛店「二七」記念館となっている。

さて、この 100 コースの中に、河南省を出発点とするコースは 4 つ含まれている。まず、1 つ目は、第一部「革命の歴史を振り返り、奮闘精神を伝承する」に含まれる「改天換地・中原奇跡」コースである。このコースは河南省安陽市林州市の「紅旗渠」を出発点とする。この「紅旗渠」（紅旗水路）とは、渇水に苦しんでいた林州の人々が、絶壁を削って建設した全長 70.6 キロメートルの水路である。1960 年から苦節 10 年に亘る建設期間中、30 万人が参加し、掘削で出た土石は 1,818 万平方メートルに及ぶ。この土石量で、もし、高さ 2 メートル、幅 3 メートルの壁を造ると、広州からハルピンを結ぶ長さである（2021 年 4 月 13 日『大河報』）。

「紅旗渠」は「人工天河」（人工天の川）と称され、その建設にかけた地元民の情熱と献身的努力は「紅旗渠精神」として今に引き継がれている。それ自体、国家 5A 級旅行名所に指定されているが、私は残念ながら、まだ、直接見学したことがない。ただ、この「雑感」で以前紹介した「豫商大会」（国内外の河南省出身の経営者が一堂に会する年に一度の祭典）が 2013 年安陽市で開催された際、同市の幹部が市の象徴と

して「殷墟」とともにこの「紅旗渠」を紹介していたのを覚えている。

このコースは続いて「劉鄧大軍指揮部旧跡」に立ち寄ることになっている。劉鄧とは劉伯承と鄧小平を指す。1946年に本格的に始まった国共内戦において、この2人の指揮する共産党軍(人民解放軍)は1947年6月末以降、安徽省、湖北省、河南省の境にある大別山に向けて侵攻することになる。これにより、共産党軍の全国的反抗が始まり、革命の勝利につながった。このコースはさらに開封市蘭考県に入り、最後は焦裕禄烈士陵园で終わる。蘭考県と焦裕禄については、この「雑感」でも昨年5月号でやや詳しく触れた。

大別山を巡る攻防とその勝利の跡を本格的に辿るのは、河南省を起点とする別のコース「革命大別山・紅色鄂豫皖」である。このコースの「みどころ」は、劉鄧部隊が淮河を渡って大別山地区に入ったことを記念する河南省信陽市息県劉鄧大軍渡淮記念館、同市新県鄂豫皖蘇区(湖北・河南・安徽ソビエト区)首府革命博物館等であり、河南省(豫)を出て、安徽省(皖)六安市に入り、さらに湖北省(鄂)黄冈市に至って終着する。

河南省を起点とする3番目は、第二部分「大国の重責に近づき、中国の力量を感受する」に含まれる「南水北調・活水之源」——河南省温県から出発して湖北省十堰市に抜けるコースである。南水北調(南の水を北に移す)については前回(11月号)で簡単に紹介した。4番目は第三部「脱貧の成果を体験し、農村振興を助ける」の「山郷巨変・美在中原」精選コースである。これは貧困から脱した農村のモデルとして、河南省内の洛陽市、新郷市、信陽市に属するいくつかの村を巡るという趣向である。

河南省における国共内戦を題材とした映画では、1979年公開の張錚監督による『小花』(邦題:戦場の花)が有名である(1972年出版された長編小説『桐柏英雄』の映画化とのこと)。私はDVDで鑑賞した。舞台は、大別山近くの桐柏山区、主役は、趙小花(陳冲が扮する)、革命部隊兵士の趙永生(唐国強)、遊撃隊長の何翠姑(劉曉慶)の3人である。

遡ること17年の1930年、趙家は貧しさのため、2人兄妹の妹を他人に売らざるを得ない。一方、地下党員である董・周夫妻も実の娘(董紅果)を見知らぬ他人に預けることになり、その預け先は趙家であった。つまり、趙家は実の娘を手放し、董・周の娘(董紅果)



『小花』(邦題:戦場の花)から趙小花と永生(『百度百科』より)

と実の息子(趙永生)を兄妹として育てることになる。趙家では手放す前の娘を小花と呼んでいたため、引き取った董紅果も、同じ小花と呼ぶことにした。また、趙家の娘は何姓の男に育てられたため何翠姑と名乗るようになった。

最終的には、登場人物のほぼ全員が出会い、互いの境遇を知ることになる。ただし、趙家の父母は国民党に殺されてすでに亡く、何翠姑は両親に再会することはできなかった。一方で、董紅果こと趙小花は、めでたく、実の両親である董・周夫妻と一緒にすることができた。この映画では、それぞれがこうした複雑な過去を負っているにも関わらず、その点で登場人物同士の感情の行き違い、^{わだかま}蟠りはまったく見られない。家族関係を大切にしつつも、それを超越して革命成就のために一致団結するということなのであろうか。

ところで、現在活躍中の賈樟柯監督に『二十四城記』(邦題:四川のうた)という作品がある(2008年公開)。これは、2007年、50年の歴史に幕を閉じることになった四川省成都の巨大国営工場「420工場」を舞台に、その従業員と家族の姿をドキュメンタリーとして描いた映画である。出演者の多くは、実際の労働者であるが、本職の俳優も参加している。

この映画に、顧敏華という中年の女性労働者(架空の人物)が登場する。彼女は同僚から「小花」との愛称で呼ばれている。その理由は1979年、つまり、この映画から30年ほど前に人気を博した映画『小花』の主人公に似ているからというものである。映画『二十四城記』の中で、当時の映画『小花』の場面が流れるが、年齢はかなり違うもののたしかに趙小花によく似ている。顧敏華に扮しているのは30年後の陳冲その人だから当然である。

中国にある旅行会社がネット上に掲載している「秦皇島の人気観光地ランキング 2021」に拠れば、第1位は「わんりい」先月号でも紹介した「鸽子窩公園」(評価点 4.5/5、レビュー数 8,775)である。続いて第2位は「自然動物園」(評価点 4.4/5、レビュー数 6,952)、そして、第3位は「老龍頭」(評価点 4.6/5、レビュー数 6,042)となっている。以下、第4位は「山海关」(評価点 4.3/5)、第5位は、わんりい7月号で簡単に触れただけだった海岸近くの施設である「新澳海底世界」(評価点 3.8/5)である。

おそらく、自社ツアーに参加した人々に、訪れた観光地ごとに、満足度を5段階で回答させた結果に基づいたものであろうが、レビュー数がそれぞれ異なるために、単に評価点の平均値の高さだけで順位付けがされていないことが分かる。

また、ランキングと共に掲載されている、レビューした個人の評価点とコメントを見ると、どうやら宿泊したホテルに対する満足や不満、入園料の高さなども評価点に影響を与えているようである。

■すぐ近くにあった「老虎子海上公園」

10月号から「北戴河海滨汽车站」を起点にして観光地案内を続けている。

最も近い距離にある観光地は「老虎子海上公園」だと思われる。南に向かう「海宁路」を1キロほど歩いて、魯迅公園を右に見ながら更に1キロほど進んで海に達すると辺り一帯が砂浜になる。路線バスを利用するならば、22路に乗り一つ目の「老虎子公園」バス停で下車するが、そのバス停は魯迅公園の手前にあり、その先は結局、歩くことになる。

公園の名称は、松林の中や海岸のあちこちに白い巨岩が散在し、白い虎に見立てられたことが納得される。それらの岩の風化で出来た白い砂浜とともに、独特な景観が楽しめた。

入場料金はわずか4元だったが、あるのは海水浴場に併設された更衣室やシャワー室くらいで、大がかりな遊戯施設や設備は無いので、海辺や砂浜で家族連れが遊んだり、カップルがゆっくり散策する場所になっていた(右上写真)。



家族連れやカップルが多い「老虎子公園」(2016年10月撮影)

■「平水橋公園」へ足を延ばす

わざわざ出掛けて来て、老虎子公園を散歩しただけでは時間を持て余し、いったん、「西海滩路」に出て西に向けて歩いていたら、「望亀亭」という展望台があった。その前に広がる砂浜は海水浴場として開放されているが、産卵するウミガメがやってくるのだろうか？ 沖合を見ると光る海面に沢山の小舟が浮かんでいた(写真下)。

更に西側に伸びる海岸は「平水橋公園」として整備されている。緩やかに曲がりながら続く木道の両側には花壇が作られ、四季に合わせ、いろいろな草花が植えられている。

のんびり歩いて行くと、張学良と趙一荻夫人の像が建っていた。此の地の近くに邸宅を構えていたことに因るようである。

そこから道路に戻ると、22路の「鉄疗」バス停があったので帰路についた。バスターミナルは此処から3つ目であり、反対方向に乗ると南戴河方面を經由して、「北戴河」鉄道駅に行くことが出来る。



帆柱のモニュメントと広がる砂浜 (2016年10月撮影)

■「联峰山公園」を歩いたが・・・

2016年9月に北戴河区の西の外れに住むことになり、最初に出掛けた場所が「联峰山公園」だった。しかし、歩いたルート等の記憶は断片的でしかない。

- 当日の朝は太陽が見えず、天気が悪いのかと思ったが、やがて青空が見えてきて晴れ上がった。
- 同行者と共に22路のバスに乗り、公園入口の真ん前のバス停で降りた。入園料はパスポートを見せて半額になり14元だった。
- 園内は先ず洒落た敷石の幅広の舗装道路が続き、脇にロバに乗った少女の像があった(意味不明)。
- 黄色のゴミ箱がところどころに設置されており、「静粛」を促す標識も建っていた(ラジオをうるさく鳴らして来る団体と一度擦れ違った)。
- 手作りのサンドイッチを持参し、途中の展望台でシェアして食べた。
- 山頂の近くまで、歩きやすい道路や階段が続き、手すりも整備され、杖を突いて登る人もいる。
- 頂上近くになると、岩の間を縫って進んだり、剥き出しの岩の上を歩いたりした。あちこちの岩には赤い文字が刻まれていた。
- デジカメとスマホを使い、たくさん写真を撮った。
- ラセン階段が剥き出しの鉄塔のような展望施設(瞭望塔か?)に登ると、別荘地や海岸地帯を良く見渡せたが風景に陰影がなく、あまり趣を感じなかった。
- 対峙する彼方の頂上に金色に輝く塔が見えた。
- 寺院や「蓮池」に立ち寄り、流れの岸に中国式屋根の付いた真っ赤な建物があり、天井部分に絵が描かれていたので写真を撮った。
- 帰路も22路の「联峰山公園」バス停を利用した。

■歩いたルートが良く思い出せない訳は？

公園内の複雑なルートをどのように歩いたか、事物を見た順番はどうだったかがさっぱり思い出せない最大の理由は、メモ代わりにたくさん撮った写真を失ってしまったことにある。持参したデジカメと中国製スマホのそれぞれの写真データを、貸与されたパソコンを経由させてUSBに取り込んで保管を重ねたつもりだったが、どこかの段階で、一部の写真データは上書きされて消えてしまったらしいのである。必死で探し、発見できたのは、蓮池の建物天井や梁を撮った写真が7枚だけである(写真右上)。



建物の天井[写真上]と梁の装飾[写真下](2016年9月撮影)

更なる理由としては、未だ周辺の地理にも不案内な時期だったことに加え、数日前に突然、誘われたこともあり、目的地に対して全くの白紙状態で出掛けたこと、同行者は中国人女性5人で、うち3人は初対面であり、日本語を理解しなかったこと、それらが重なり、注意散漫になり、いつものペースで歩き、立ち止まって周囲を見たり、案内標識などを理解したり、確かめたり出来なかったためだと思う。

■「联峰山公園」についての追加情報

せめて、以下の情報を追加しておくことにしたい。

- 1919年に「蓮花石公園」が作られた。巨石の形が蓮の花を思わせたことに因った。
- 最高地点は海拔153メートル。巨石、樹木、花木などの景観が情趣に富み、歴史上の人物も訪れた。1985年に拡大整備され、改称された。2017年に4A級景区となった。
- 頂上の周囲に、「鸡冠山」「神山」「神犬峰」「望海峰」「龙山」の峰々があり、現名称の由来になっている。
- 頂上から見えた金色の塔は、「三国志」で有名な曹操に因んだ「曹操观沧海」の記念塔である。
- 「临风亭」「望海亭」という展望台がある。「望海亭」の近くには「毛泽东观日出处」の刻石がある。
- 「古刹如来寺」「观音寺」の2つの寺院がある。
- 他の見どころに「山眼井」「臥仏洞」「桃园洞」「避雨石」「观海石」「獅子岩」「松柏石」「福飲泉」「螻公桥(岩の上に掛けられた橋)」などがある。
- くだんの観光地ランキングでは第15位である。写真データの大量消失は他の都市を観光した際に撮影した写真にも及んでいるようで、考えると恐ろしい。今更ながら残念に思われる。(続く)

■参考 URL: <https://jp.trip.com/travel-guide/>

70年代生まれの私が読んだ小説（上）

ちょう いてい
趙 迪

私は、いわゆる^{qīlíng hòu}〈70后〉の一人です。〈70后〉とは、1970年から1979年の間に生まれた世代の意味です（因みに、50后、60后、80后、90后なども言います）。私について言えば、中学生の時はすでに1980年代の半ばでしたが、小学生の時いつも見ていた子供が読む本とはガラッと変わって次第に小説にのめり込むようになりました。その頃の中国は物資の乏しい時代で、テレビのある家は少なく色々なゲーム機は言うに及ばず、せいぜい映画を見たりお芝居を見るといった娯楽しかありませんでした。しかし私は学校での授業を除く余暇の時間は、ほとんど読書に夢中でした。父母の蔵書を見始めると—今思い出してみると—中学生がこのような本を読むのは、まるで大きな象を丸呑みするかのように全く歯が立たず、また物事をよく理解せずに鵜呑みにするかのようでした。例えば中国の四大名著である「紅樓夢」、「水滸伝」、「三国演義」、「西遊記」などはそうでした。今では若年層に焦点を合わせた「少年版」がありますが、当時は私が読んだのはどれも長ったらしい原作で、繁体字で書かれてあるものもあるのです。更には清末の作家である吳研人の書いた「目睹二十年之怪状¹⁾」は、文語文と口語文の入り混じったものです。同じく清末の李伯元の「官場現形記²⁾」も同様です。

一方海外の文学作品、例えば推理小説のジャンルでは最高峰と言える「シャーロック・ホームズの事件簿」も読みました。作者はご存知のように英国のアーサー・コナン・ドイルですが、主役の探偵シャーロック・ホームズの複雑な事件に対する推理と、事件の解決に至る筋道に深く吸い寄せられました。それらはかつて私に探偵になりたいという夢を与えてくれました。

また、母は神話が書かれてある「封神演義³⁾」という長編小説が好きでしたが、なかなか読み終えませんでした。しかし私は一週間で読み終えまし

た。その後父の書棚の本は遍く読み終わりました。今から考えると、これらの本はほぼ子供向きではありません。

その後、改革開放が始まった80年代では台湾の作家の作品が中国大陸を風靡しました。代表的な作家は、琼瑤⁴⁾、三毛⁵⁾、



三毛(ウィキペディアから)

席慕容⁶⁾、などが挙げられます。当時は本はなかなか買えませんでした。従ってこれらの本は、同級生仲間の中で回覧しましたが、一冊の本は自分の手元に置く時間はせいぜい2～3日と言う具合でした。その時次に待っている同級生からは待ちきれずに矢のような催促を受け、そのような状況ですから、これら沢山の小説は皆授業中に読んだものです。先生は教壇で面白い授業をされていたのですが、私達は聞いているふりをして、しかし教科書の下に回覧している本を置いて夢中になっていました。今考えると先生に申し訳ない気持ちです。教科書の下に置かれた本は—「幾度夕陽紅」(琼瑤)、「夢里花落知多少」(三毛)、「滾滾紅塵」(三毛)、「万水千山走遍」(三毛)、「鹿鼎記」(金庸⁷⁾)、「射彫英雄伝」(金庸)などです。

「琼瑤」は、恋愛小説の分野の草分けです。その創作された小説は愛情がいちばんとの価値観で、日常生活から離れて理想主義の中に置き一つ一つの熱烈な恋愛小説を書いています。と共に映画化されています。そして何世代かの人々のぼんやりと霞んだ青春の歳月を埋め合わせているのです。その中で私達〈70后〉は、その埋め合わせの第一世代と言えます。その時私達はちょうど恋に芽生え始めるのです。愛情に対してうっすらと分かりか

けてきた時、中国大陸では早い恋は軽蔑され、禁止されました。私達第一世代の愛情の理解は、ただただ琼瑶の小説の中から汲み取っているかのようです。私達第一世代の恋愛観は、つまり愛情が第一で、愛情は物質的なものを凌駕することで形づくられています。私たち世代は、彼女から恋愛観にとどまらず、修辞学上の影響も受けました。琼瑶の作品の修辞文や反論文は、その巧みさで有名なのです。

「三毛」は、私は比較的好きな台湾の女流作家で、特に散文が有名です。三毛は生まれながらのロマンチックな人です。彼女の一生は数え切れないほどの長く険しい道のりを辿って来ました。しかし中国人としての意識は彼女の心の中に深く根ざしていました。三毛は作品を書く時、ある種の技巧とか風格にこだわることなく出来上がった作品はありのまま自然であります、その中に含まれている意味は無限です。三毛の沢山の読者は、「流浪」こそが彼女の本当の名前のように感じています。彼女の作品の中には「世界の果てをさすらう」と言う意味があります。

三毛の一生に書かれたものには、「撒哈拉的故事」、「哭泣的駱駝」、「雨季不再来」、「温柔的夜」、「梦里花落知多少」、「背影」、「我的宝贝」など、十数部の作品があります。彼女の散文は広く取材し、書きぶりは素朴でロマンチックで独特な気品があります。いくつかの散文は異国情緒に満ち溢れ、これらの作品は皆三毛の人類、生命、自由、および大自然への歓喜を表しています。また三毛のこれらの作品は、知識、趣味、芸術が一体となって融合しており、これによって高度な文化的な価値を備えています。当然彼女の作品には哀情をのべたものもあります。例えば「不死鳥」「背影」「似曾相識燕归来」などですが、これら作品の印象は、憂鬱、淡泊で、しかも読み応えのあるものです。

その頃の中国大陸は、改革開放が始まったとはいえまだまだ閉鎖的でしたが、我々は三毛の「撒哈拉的故事」によってサハラ砂漠に行き現地の民族の風俗習慣や人間の温情にふれることが出来ま



サハラ砂漠の三毛（百度百科から）

した。またご主人の荷西^{ホセ}⁸⁾との平凡ではあるけれどロマンチックな異国情緒も体験できるのです。読み始めるとユーモアやウイットに富んでいて、言葉遣いは軽やかで、何の憂いも悩みも感じさせません。しかしながらこのように才能に満ち溢れた女流作家は、1991年1月4日に自殺するのです。私はその日の事を鮮明に覚えています。私の友人は私が特に三毛を好きであることを知っていて、わざわざ私の家に来て訃報を告げてくれました。私にとってこのことは大きな打撃でした。たしかにこの作家は、世界のことは十分理解していますが、自分自身のことについては分からなかったのです。生きている人は強いのです（決して自ら死を選んではいけないのです）。（続く）

■注

- 1) 目睹二十年之怪状: 清朝後期の作家吳研人が創作した長篇小説。清朝後期の政治的、道徳的、社会的、世情を描写した。
- 2) 官場現形記: 清朝後期の作家である李伯元が書いた小説。現実を批判するために30以上の官僚役場についての物語を書いた。
- 3) 封神演義: 明時代の許仲琳が書いた小説。「封神演義」とも呼ばれ、武王が周を倒した物語です。
- 4) 琼瑶: 台湾作家(1938~)。
- 5) 三毛: 台湾作家、本名は陳平(1943~1991)。
- 6) 席慕容: 中国作家(1943~)。
- 7) 金庸: 香港作家、本名查良鏞(1924~2018)。
- 8) 荷西(Jose Maria Quero, 1952~1979): 三毛の夫、スペイン人。

大連の伝説

聞き書き・訳：大槻一枝 / 一瀬靖子

名を大海^{ダーハイ}という貧しい若者と、小妹^{ショウメイ}と呼ばれる貧乏な小娘がいた。大海はたくましい立派な体の持ち主。小妹は貧しい家の出身ながら、優しい目をした人に好かれるタイプの女の子で、針仕事が上手。縫ったり繕ったり、機織り、刺繍、何でもこなす働き者で、野良仕事も、家の中の仕事も、彼女に任せれば心配なし。農家の人々はみな“金持ちに嫁いで楽をするより、大海に嫁いで苦勞する方がいい、小妹を娶って苦勞しても、金持ちの山海珍味は食わない”と言っていた。

金持ちとは誰か？ それは大海や小妹の雇い主であった。雇い主の地主は、広大な土地を持っている。どれほど広いかって？ 四頭立ての馬車で三日三晩走り続けても、境界が見えないほど広いのだ。使用人は金持ちの罵倒殴打に、文句のひとつも言えないというありさまであった。大海、小妹もその中の一人。彼らは口に黄連（苦いものの象徴）を含み、体は苦しみの海に浸って毎日を過ごしていた。

大海は朝から晩まで休みなく働いた。毎日太陽を見送り、月を迎えてもなお休むことなく働いた。夜になってアンペラに横たわると、彼は独り考えをめぐらすのであった。

「もし、私に土地があったらどんなにいいだろう。種をまき、しっかり肥料や水をやって、常に雑草を除けば、畑の収穫は、金持ちの数倍も多くなるだろう・・・」

考えながら彼は眠りに落ちた。と、突然彼は誰かが彼の服を引くのに気付いた。目を開けて見ると小妹が枕元に立ったまま、木の枝に引き裂かれた彼の服を丁寧に縫い合わせている。彼は喜んで手を伸ばし、小妹の手を握った。だが握ったかと思った刹那、大海は目を覚ましてしまった。彼は体を起こして夢の光景を思い浮かべ、独り苦笑いをした。

暖かく優しい声がまた彼の耳元に響いた。

「大海兄さん、何を笑っているの？」

大海はびっくりして、

「小妹じゃないか。どうしたんだ？」

小妹は恥ずかしそうに、言った。

「さっき私兄さんの夢を見たの」

大海は、温かい手が彼の手を握りしめたのを感じ、感情を高ぶらせて、

「これは夢じゃないよね？」

「夢じゃないわよ。見て、私は小妹でしょう？」

大海は小妹の手を胸に抱きしめ、何も言わない。

「兄さん、私たちここを出ましよう。こんな恐ろしいところから早く離れてしまいたましようよ」

二人は暗闇に乗り人知れず逃走した。彼ら二人はまず北へ向かい、七七四十九日歩き、さらに七七四十九日東へ向って行き、新しい雇い主を探した。しかし優しい物分かりの良い主人はいない。どうしたらいいだろう。二人はまた雁が飛んで行く南の方へ向って歩いた。歩きながら魚を捕り、狩りをし、山を越え、川を渡った。花が咲くころになると、流れの美しい静かなところに着いた。

ここは山を背後に、三面海に囲まれている。林には摘みきれないほど野生の実が生り、捕りきれないほどの野獣がいて、海には魚やエビが捕りきれないほどいた。さらに山の斜面の平坦なところには、鋤、鍬、石の食卓や銅のお椀などが彼らのために用意されたように並んでいる。

大海と小妹は思わず顔をほころばせ、

「いいところね」

と喜んだ。それから大海は毎日鍬を担いで山の荒れ地を耕し、小妹も石を積んで塀を作ったり、野菜を作って食糧の足しにした。生活は楽ではなかったが、二人にとっては蜜より甘い毎日であった。

ある日、大海が山路を登って行くと、突然海から強い風が吹いてきた。そして風が止むと何かが彼の足にまといついた。見ると古びた褌^{ダーリアン}（錢入れ）である。大海は何の気なしにこれを腰にぶら下げた。

ここは良い土地であるが、農業をするための種子がない。ある日の晩、若夫婦は悩んだ挙句、肩を並べて浜辺に佇み、青い海をぼんやりと眺めていた。潮は満ち引きを繰り返し、満天の星は絶え間なく瞬いて



褡褳[ダーリアン] (紅動中国より)

いる。二人は良い考えが浮かばないまま家に帰った。

夜が明けた。大海は古びた銭入れを取り出して独りつぶやいた。

「銭入れよ、金持ちの銭入れはいっぱいに膨らんでいるのに、私のは空っぽだ。いつか貧しい者たちの銭入れがいっぱい膨らんだら、どんなにいいだろう」

すると、思いがけなく銭入れは少しずつ膨らみ始め、黄金色のトウモロコシの種が、銭入れの口からこぼれだした。

大海は自分の目を疑い、急いで小妹を呼んだ。小妹は飛び上がって喜び、

「兄さん、知らないの！ これは宝の銭入れよ！」

彼女は銭入れを胸に当て、心を込めて感謝した。

「銭入れよ、宝の銭入れよ、貴方は私たちの命の恩人です」

その後、二人は再び種子に悩むことはなかった。ひと声種を求めれば、欲しい種はいくらでも銭入れからあふれ出る。二人は何の心配もなく荒れ地の開墾に励み、種を播き、一枚、また一枚と田畑を増やしていった。二人はひらけていく農地に言い尽くせぬ喜びを味わった。

荒涼とした山地に、人家の煙が立つようになった。野草が伸び放題だった土地は趣を変えた。山から掘って来た野生のネギを栽培して食卓に載せた。林から運んで来た杏の木を家の前後に移すと、果物は食べ放題。大海は山海の珍味を携えて山を越え、川を渡って、豚、馬、牛、羊などと交換した。知り合った貧しい若者を招いて世帯を持たせ、荒れていた山、海、川は日ごとに賑やかさを増した。

儲けになると聞いた金持ちが、魚の臭いをかぎつけた猫のように集まって来た。その中には大海、小妹のかつての雇い主もいた。地主は大海や小妹が宝の銭入れを持っていると聞き、たちまち目を血走らせた。早速大海を呼び、腹立たし気に、

「お前とあの子はうちの雇人だった。この銭入れはうちから盗んだのだろう。すぐ返すなら文句は言わないが、そうでなければ二人を逮捕し、役所に突き出す！」

いうが早い、彼は銭入れを奪い、踵を返して駆けだした。大海は慌て、追いついて銭入れを奪い合った。小妹も大海を助けてもみ合う。地主は銭入れの中ほどをつかみ、大海と小妹がその両端を握った。互いに奪い合って譲らない。この時、地主の犬(手先)が突っ込んで来て、さっと銭入れを引きちぎった。手先どもは皆ひっくり返ってひいひい叫び、大海と小妹は、半分がちぎれた銭入れをつかんだまま空高く舞上がった。

大海と小妹は高く、さらに高く舞い上がり、肩を並べて飛び去った。二人の心はいつもひとつ、二つにちぎられた銭入れもまたひとつにつながり、どんどん大きくなって空中に大きな山を築いた。ドーンという大きな音が響き、大山が地に落ちた。金持ちの地主やその手先は、山の下敷きになってしまった。銭入れの両端は二つの高い山になり、二つの山は細い道でつながった。その中に銭入れ型の半島ができた。湾の中は魚貝やエビが数知れず、捕りつくせない。山上は各種の果物に満ち、特にリンゴの木は山のいたるところに生え育ち、ここは本当の魚・米・果物の豊かな地となった。

人々はこの地で開墾、種まきに力を注ぎ、孫子を育てて、日々の暮らしは日毎に改善された。大海と小妹は？ 人々はその後一度も彼らを見かけたことがない。ある人が、月の明るい風の静かな夜、二人が鋤を持ち、種を撒くところを見かけたと言った。

その後人々はこの地を^{ダーリアン}褡褳(銭入れ)と呼び、この湾を^{ダーリアン}褡褳湾と呼ぶようになった。後に字画の少ない文字を使うようになって、今日の“大連”になったという。

郭倍成(大連港の労働者 男性 65歳)の口述

■2022年わんりい新年会のお知らせ

11月号でお知らせしたとおり、2022年1月30日、2年ぶりの新年会を開催いたします。このコロナ禍の状況下、来年の話で、鬼に笑われる前に、状況の変化による変更を余儀なくされることも加味しながら、ご案内を致します。

現時点で、会場の麻生市民館は通常の使用許可を出していますので、例年に準じて下記の通りに開催致します。

▶ 記 ◀

●2022年わんりい新年会

日時：2022年1月30日 11:00～

会場：麻生市民館 調理室

定員：40名

会費：2000円（お土産付き）

内容は殆ど例年通りですが、今年は、お土産として、わんりい特製の月餅2個（小豆餡・木の実餡各1個）を用意いたします。月餅は中秋節の供え物ですが、わんりいの月餅は時無し。来年の春節は2月2日ですから、春節に向けてお楽しみください。ビンゴもあります。

余興は、参加者の中からご披露していただきます。ご希望の向きは、お申し越してください。

せっかく久し振りに開催できる新年会ですから、皆さんと一緒に楽しみましょう。

とは言え、このコロナ禍、状況がどう変わるか予測不能です。行政から、使用人数制限、時によっては施設の使用不許可と言った通知が出ることも充分考えられます。その時には、指示に従わざるを得ません。このような事情もお含みの上、奮ってお申し込みください。

■申し込み先：‘わんりい’代表：寺西 俊英

Eメール：t_taizan@yahoo.co.jp

Tel：090-1425-0472

●頂いた感想をご紹介します。

◎11月号を読んで 後藤 芳昭

11月号「漢詩の日本語訳」李青照〈詞〉[如夢令]の「緑肥紅瘦」について

毎号の植田先生の「漢詩の日本語訳」は、‘わんりい’が届いたらすぐ目を通す楽しみなページです。

11月号の李清照の[如夢令]の最終句にある「緑肥紅瘦」について思ったことを書きます。

詞の解釈では、前後の文脈から、夜来の風雨で散った海棠の樹の様子を詠んでいるので、葉はたくさん、花は少ないことを詠んだんだな？ となんとなく推測できます。

ただ、「○肥○瘦」は、「環肥燕瘦」（楊貴妃は、ふっくら、趙飛燕はスリムな美人）の使い方しか知らない僕は、緑＝葉、肥＝葉がたくさん残っている、紅＝花、瘦＝花が残り少ないと表現したこの女流詩人の独一無二の感性に着目し感服しました。

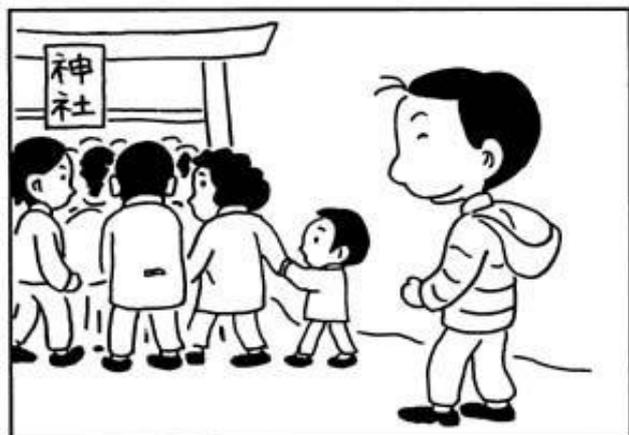
しかし、中国人からすれば、肥は人でも物でも豊富、瘦は人でも物でも貧弱をイメージするので簡単に表現できるのでしょうか？ どなたかご教授いただければ幸いです。日本語でも土地が肥沃と言いますが。

この〈詞〉は、中国の人気テレビドラマ「明蘭—才媛の春(原題:知否知否應是緑肥紅瘦)」で毎回エンディングのテーマ曲の背景画面に使われていました。きっと人気があるものと思います。

そして、この手の中国の漢字と同じ日本語の漢字の違いについては、‘わんりい’で「中日辞典」からの意外な発見欄で河野公雄氏が、毎号連載されています。丁寧でわかりやすく、詳しく書かれていますので、興味がある方は、是非一読をおすすめします。

満柏画伯の4コマ漫画をご紹介します。

初詣



■日本の初詣(満柏)

元々は、日本も中国と同じで春節を年の初めとしていましたが、西洋化がすすんでからは1月1日を新年とするようになりました。祝う日にちが変わっても、普段は遠く離れている家族が集まって来て、大みそかに除夜の鐘を聞き、団らんを楽しむ風習は変わりません。

元日の零時を過ぎると、多くの人々が初詣に訪れます。この日ばかりは、大部分のお寺や神社には人の波！、波！、波！が押し寄せます。

しかし、この初詣をする人の中に、そのお寺なり神社の敬虔な信者は少なく、にわか信者が多く、賑わいにつられて集まるただの人がさらに多いのです。統計によると、日本の各種宗教の「信者登録」の総計は、日本の総人口数より多いのです。これは、各種宗教行事にレクリエーションとして参加する人が多いことを物語っています。

実際の生活の中でも、子供が生まれると神社にお参りして厄除けをし、結婚式は基督教の教会で上げ、死ぬとお寺でお坊さんにお経をあげてもらい死者の魂を苦界から救い出してもらおうのです。その様子は雑多で、本来の主旨からかけ離れた形式主義に陥っています。

人々も、初詣をするのに手ぶらでは行けません。新年の数日間は、神様・仏様も喜んで下界に降りて来て、人々の願いを聞き届けてくださるように思えて、お賽銭やお札の売り上げが多く、住職や宮司は、神様に代わって代金の受け取りに忙しい。

◇ 満柏画伯の漢訳俳句 ◇
今月の俳句は、高浜虚子の1句です。

遠山に 日の当たりたる
枯野かな

yuǎnshān rì gāo zhào
远山日高照

kū fēng yè tiān hán
枯风野天寒

2021夢広場開催!!

第23回 町田発国際ボランティア祭 ぽっぽ町田イベント広場 2021年11月3日(祝)

2021 夢広場がぽっぽ町田で開催されました。昨年はコロナの状況が厳しく見送りになり、今年の開催をどうするか何度も委員会で検討しました。その結果、コロナはかなり収まってきているので規模を縮小し、物品販売ができる団体の出店だけで開催することとなりました。もちろん各テーブルの上には消毒用アルコールを置き、密にならないようお互い心がけて行いました。今まで恒例だったケーナやオカリナの演奏や国際色豊かなダンス、例年「ボイストレーニング」で会場を盛り上げていただいている Emme (エメ) さんのコーナーは見送ることとなりました。出店団体は、わんりいを含め8団体(下記参照)でしたので少し寂しい感じがしましたが、その分ゆったりとしたレイアウトなので来店の方々も商品をゆっくりと見ることが出来たようです。わんりいは例年通りラオスの山の民・モン族の女性たちが丹精込めて刺繍した大小のポーチ、ペンケース健康保険証入れ、しおりなど、および絵本作家の佐藤紀子さんデザインのトートバックを販売しました。刺繍の造形美と宮沢賢治の童話をイメージしたバックに多くの方が見入って、お買い上げいただきました。

10時に稲野実行委員会の開会の挨拶で祭りは始まり、午前中にワークショップを2回行いました。午後は1時半頃、実行委員長の「夢広場宣言」の読み上げから始まり、石阪市長をはじめとする4人の方々の挨拶があり、午後3時にお開きとなりました。

11月19日には実行委員会のメンバーが参集し反省会が行われましたが、各人一様に「コロナが完全に収束していない中、とにかく開催できてよかった」「一日中好天にめぐまれよかった」と感想を述べておられました。来年こそ今までのような演奏あり、ダンスありのイベントにしたいね!と祈りつつ散会しました。(報告:寺西俊英)

■出店団体

★わんりい★ネパール・ミカの会★シリアンハンド★(社)アムネステーインターナショナル日本町田グループ★リョウフラスタジオ★(社)東京アジア応援計画★東京都行政書士会町田支部★町田国際交流センター



第 164 話 花が怒る

先生が小王に訊いた：「教科書に『ミツバチが花園に活気（生气）を与えた』と書いてあるが、これはどういう意味かね？」

小王が答えた：「ミツバチが花粉を盗んだので、花たちが怒った（生气）のです」

教室の皆が大笑いすると、小王は続けて言った：「花たちが怒らなかつたら、花が一斉に咲く（鲜花怒放）ことはないんだよ！」

第 165 話 実地教育

宿題をやっている小明が訊きました「パパ、かまどの煙が裊裊じょうじょうってどういう意味？」

ちょうどゆったりとした気分気分で新聞を読んでいた父親は、手にしたタバコの煙を立ち昇らせながらいいました、「見えるだろ？ これが「裊裊（ゆらゆら）」と立ち上る煙だよ」

暫くすると、小明がまた訊きました：「パパ、『狼吞虎咽（がつがつと貪り食う）』ってどんなこと？」

父親は新聞から目を離さず、じれったそうに言いました「まあ待ちなさい。食事の時に見せてあげるよ」

第 166 話 ことわざの解釈

小虎は、国語の成績が良いと聞いても信じられない家族は、彼を試してみました。

お姉さんが訊きました：「『千金難買』ってどういう意味かしら？」

小虎：「お金をいくらかけても買えない、非常に高いということだよ。例えば、姉さんのボーイフレンドが、1000 元以上の品物を買ってくれたのに、姉さんが彼との結婚に「うん」と言わなかつたら、姉さんは彼にとって「千金難買」だよ」

次に兄さんが訊きました：「『扑朔迷離』ってどういう意味分かるか？」

小虎：「雌雄を見分けるのが難しいって意味だよ。例えば、兄さんとガールフレンドが二人とも髪を

長く伸ばして、花柄のシャツを着たら、どちらが男でどちらが女か分からないでしょ。それを『扑朔迷離』っていうんだよ。

最後にお父さんも訊きました：「『錦上添花』とはどういう意味分かるか？」

小虎：「良い物の上に、更に良い物を加えるっていう意味だよ。例えば、パパの会社の工場長の息子さん息子が結婚する。あの家には何でもそろっているけれど、パパが結婚のお祝いに、テープレコーダーを贈るようなときに使うんだよ」

第 167 話 「白」は「日」より一画多い

中秋節のころ、お菓子屋さんが月餅を売り始めたが、看板を書き間違えて、月餅の「月」が「日」になっていた。

一人の小学生がそれに気が付いて、店員に話しかけた：「おばさん、月餅の「月」の字が「白」の字になっているよ。早く直した方が良いよ！」

店員：「坊や！ おばさんは騙されないわよ。『白』だなんて！ 『日』より一画多いじゃないの。間違いを増やしちゃだめよ！」

第 168 話 「川」の字はお休み

「川」と言う字だけを知っている人がいた。ある日、彼は本を紐解き、「川」の字を探してページをめくって見たが、見つからなかった。暫くして「三」の字を見た彼は驚いて言った：「とうとう見つけたぞ！ 『川』の字を探しても見当たらなかつたのは、こんなところで寝ていたからなんだな！」

第 169 話 一回 6 元

蔣医師の子供は学校で規則を守らない。先生が注意してもちつとも直らない。

先生が怒って言った：「ちゃんと規則を守れないなら、お父さんに学校にきてもらうよ」

蔣医師の息子：「いいですよ。パパの往診料は 1 回 6 元です。先生は知り合いだから、予約料は只にしておきます。」

【わんりいの催し】

皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：12月14日(火) 10:00~11:30
美術工芸室
2022年1月25日(火) 10:00~11:30
視聴覚室
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

### ❀❀ 中国語で読む 漢詩の会 ❀❀

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：12月12日(日) 10:00~11:30  
2022年1月16日(日) 10:00~11:30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)

Email:ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp

(有為楠)



### ■ 2022年1月・2月定例会 代表宅

▼1月13日(木) 13:30~

▼2月10日(木) 13:30~

### ■ 'わんりい' 発送 三輪センター

▼2022年1月号

12月28日(火) 10:00~

▼2月は休刊

### ☆☆編集後記☆☆

コロナで明けた2021年もいよいよ最後の1か月。コロナの蔓延は小康状態を保っているとはいえ、何時再拡大するか分からない状況です。総括すれば、2021年はコロナで明け、コロナで暮れる1年ということになるのでしょうか。2022年は、コロナを気にせず暮らせる1年にしたいものです。

12月には、新しい年を迎えるために、懸案事項を解決したいと思うものですが、現在の懸案事項と言えば、地球温暖化の阻止、そのための脱炭素生活の推進ということになりますが、こればかりはなかなか進みそうにありません。

本当は一刻も早く生活様式を脱炭素の方向に切り替えなければ、地球上に人類が生息することが難しくなるのだそうです。そうなれば、人々が新しい年を迎える楽しみもなくなってしまいます。未だ間に合う中に、早く行動を起こさなければ…。

~~~~~

'わんりい' は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800円、入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
10月以降の入会は、当年度会費1000円。
■問合せ：044-986-4195 (寺西)

'わんりい' 269号の主な目次

寺子屋・四字成語(48) 老当益壮	2
「日译诗词」(18) 崔颢『長干行』	3
「漢詩の会」便り(53) 賈島「尋隱者不遇」	4
「中国の美人百花」(11)	6
「中原」雑感(17) 『中原経済区計画を読む』	8
秦皇島をご存知ですか(10)	10
「私の読んだ小説」(上)	12
「大連の伝説」	14
みんなの広場	16
夢広場の報告	18
中国の笑い話(48)	19
わんりいの催し	20